

可觀小説卷二十

一、鳩巢先生の荻生徂徠評

小亭兒狀

西城にて御近習衆、御講談聞被申候事も去々年二三度有之、其後絶え申候。尤御侍講の儀は曾て無之旨。荻生氏今以て鳴り申候。從學の徒多く有之候。去年も川崎に罷在候町人、彼地の水患を除き候事有之、其功に誇り候て公儀へ相願ひ、於川崎禹の廟を建申候。是を荻生へ右町人致示談候て、廟を守候者出家を置申候。廟記をも荻生作り申候。其事に付難問を設候て自問自答いたし候。是を對問と名づけ申候。それを遠州濱松の儒臣濱川嘉介と申者辯論仕候て、辯對問と申云板行仕候。慰に見候へとて今日御貸被成候。右辯論無益の事共にて、荻生見申候は却て笑可申と思召候。就其菅野彦兵衛此比駿河臺へ參候て申上候は、荻生事世の害に罷成候。何とぞ先生に急度御辯明被成候様にと存候。彦兵衛など申候分にては、荻生合點不仕候間、何とぞ御辯明被遊候様と奉存候。爲其參向仕候旨申に付、先生被仰候は、左様には不存候。老佛など異端の學と申ながら見識も有

之、辯論の相手に成申者に候。其外揚墨の類もそれにて候。如此者とは辯論仕事に候。荻生が道は事物の外に有之と申儀、氣質は變化難成事と申儀、宋儒は聖賢の道を不知など、申事、畢竟氣違か酒狂人の様子に候。本氣にては申されぬ事に候。然れば氣違・酒狂人の言を、何かと取擧候て辨可仕様は無之事に候。菅野には喪心の人、酒狂の徒の言を、何かと取擧て論じ被申料簡に候やと被仰候へば、彦兵衛も如何様左様にて候旨申候由。御尤成事と奉存候。

同門人南郭と申者詩文を善く仕候。南郭文集を撰候て、其序を諸生等作り申候。其内本多伊豫守殿今の若も右の序作被申候。文辭は大抵宜敷候。其序中にも、自有生民以來未有徂徠と申句有之由。無忌憚の至極と存候。當地には荻生が一流、又一流は山崎氏神道一流、是は御旗本跡部宮内と申人、今は致隱居何とやらん申候。是神道を唱へて巨魁にて候旨。又一流は小學三輪善藏唱へ申候由。堀左京亮殿學問に御志有之、先生御招待有之度旨に候得共、外交不被爲成候に付御斷り被仰入候所、左候は御門弟の内被遣候様に被成度旨申來、恩地善三郎と申人被遣候所、

大學を被承よほど志有之旨。已上。

一、鳩巢先生、大地昌言の詩句添削

先生より大地への御返書

元日の作御越候て致一覽候。池邊草色纒殘雪と申句、纒字少し相違有之様に存候。たとへば池邊草色纒抽雪など、申候は、纒字聞可申候。纒殘雪と有之ては雪の纒に殘申に成申候。然るを草色纒殘雪とは續申まじく候。たゞ池邊草色猶留雪など、被致可然候。

一、木下順庵、太鼓の譜

松雲公御弱年の比、拍子太鼓すぐれて音善く候を、御取出し御賞翫に付、木下順庵に讃を被仰付候。則鼓筒に銘せらる。

溫温太鼓。玉麗雷鳴。古來工製。筵前歡仰。

迭擧雙撥。遍聞八絃。雅音克調。幽奏以清。

特發妙韻。暫忘俗情。悅耳之賞。何物抗衡。

一、大坂陣戰歿者並にその子孫考

大阪兩度の軍、賀州の士戰死の様子如左。

慶長十九年甲寅十二月四日

大河原助右衛門

四日笹山の先手へ行き、敵方鐵炮殿敷所へ進出で其炮に

中る。戰死。

大河原四郎兵衛

右同所助右衛門は兄にして養父たり。一所に在候故、助右衛門戸を引取らんとし同じく炮にて死す。譜代の家人又來、是も死同所。主従三人。

稻垣揚部

笹山にて深手を負ひ引取て死、手負振よしと云。

大橋外記

同所にて鐵炮に中り戰死。

岡田助右衛門

同所にて一番に進み炮にて死。

川勝次左衛門

青屋口にて炮にて死

服部左源太

元和元年乙卯五月七日

眞田丸にて鎗を合せ、敵大勢と組て戰死。五月六日の事と申傳ふといへども、下祠堂には五月七日と記す。

長瀬小右衛門